

3 植民地統治と地方社会 日治時期台湾の政治 と社会史の再記述

雑誌名	植民地帝国日本における支配と地域社会
巻	40
ページ	38-39
発行年	2013-03-18
その他のタイトル	3 Shokuminchi tochi to chiho shakai: Nichi jiki taiwan no seiji to shakaishi no saikijutsu
URL	http://doi.org/10.15055/00002325

では、中京大学と共同で「台湾総督府公文類纂」講習会を開いた。国史館台湾文献館は「台湾総督府公文類纂」学術シンポジウムを開き、この重要な公文書史料に対する研究者の認識をさらに深めた。²⁰ また、研究の核心となる史料の解読や考証の他に、植民地アーカイブズのテキストの生産過程、内部知識権力の関係、そこに映し出されている植民地文化の政治的意味などについても、再検討が進められている。²¹

3 植民地統治と地方社会——日治時期台湾の政治と社会史の再記述

日治時期の台湾史研究が、1980年代後半から史料整理や研究趨勢において、重要な成果を上げたことは前述の通りである。台湾近代史の学者はそのような多様な史料の基礎に、関連した研究方法を組み合わせ、日本帝国の植民地統治史に対する再検討を進めている。そして日治時期台湾の国家と社会の関係について分析した。具体的にいえば、1990年代以降、台湾史学者は問題意識や研究方法において、社会科学とカルチュラル・スタディーズなどの異なった理論モデルの影響を受け、国家の自主性や機能的制度やエージェント論を強調することから、近代性や権力形態の文化的側面を分析する研究へとシフトしていった。研究のポイントは、近代国家の構造と資本主義発展の比較研究から、ナショナル・ヒストリーの語りのテキスト分析や文化帝国主義の歴史の再検討へと広がっていった。

一方、比較植民地研究や東アジア地域ネットワークといった研究課題を重視し、統治性と領域性などの分析概念を議論するポストコロニアル史学は、過去の研究モデルの限界を明らかにする一方で、国家と社会の関係の歴史的・空間的・社会文化の特性的比較分析がもっと重要であることを、研究者に痛感させた。それまでの時代区分を省みて、国家や社会の二元的概念の枠から離脱すべきだと考えたのである。また近現代台湾においては、世界・地域・現地といった空間の側面を据えつつ、政経・文化・民族・性別・階級といった複雑な問題を全般的にそして多元的に論述する仕組みをつくった。²²

上述した学問の趨勢の変化が台湾植民地史研究に与えた具体的影響は、以下の二つに分類できるだろう。

まず一つは、植民地の統治・管理の分析について見られる。特定の人物や政策、制度の歴史に偏重した従来の研究の成果とその限界について、あらためて見直しが進んでいる。植民地官僚研究では、公文書のアーカイブの整理や各種デジタルデータベースの確立に伴い、研究者の分析焦点は歴任した総督や上層官僚の政治キャリアの伝記から、次第に中下層官吏や各種の中間団体、そして台湾における日本人社会の個別事例へと移行していった。政策や制度研究については、法規の条文や組織沿革についての叙述にとどまらず、政策決

20 劉元孝編著『古典日文解讀法』（台北：中央研究院台灣史研究所、2006年）。

21 張隆志「知識建構、異己再現與統治宣傳——『台灣統治志』（1905）和日本殖民論述的濫觴」梅家玲主編『文化啟蒙與知識生產——跨領域的視野』（台北：麥田、2006年）、233～259頁。

22 張隆志「國家與社會研究的再思考——以台灣近代史為例」『中央研究院近代史研究所集刊』第54卷、2006年、107～128頁。

定過程やその影響・反応にも着目し議論するようになった。また政治や経済分野にも関心が広がり、それと同時に、文化的統治と知識権力の関係といった問題についても注目が集まり、ポストコロニアリズムの立場から帝国主義やその植民ディスコースを批判するようになった。²³

二つ目は、台湾島史という解釈から、植民地主義に対する複雑な反応や変化のプロセスを新たに論ずるようになった点である。かつての「日本 vs. 台湾」という二項対立による解釈構造とは対照的に、地方社会の多様性や連続性をより重視する研究者も現れた。人々の関係性を見る研究においては、家族史料や個人の日記など、民間史料の発掘や整理が進み、台湾社会史のケーススタディのための研究史料も広がりを見せた。また、漢人社会中心だった過去の研究を見直し、台湾原住民やエスニシティに関する研究も重視され始めた。空間を扱った研究では、台湾島を北部・中部・南部・東部に分け、それぞれの地域における差異を強調するだけでなく、台湾人の海外経験、特に華南・満洲・南洋地域での活動にも注目するようになった。国の枠を超えた歴史的視座から、台湾とその他の植民地の歴史経験を比較する研究も行われている。²⁴

結論

アメリカの中国史家 Paul Cohen は、戦後の中国研究を振り返った著作の中で、1970 年代末以降、研究成果の蓄積や批判意識の高まりにより、研究者の視角は中国中心史観に向かい、戦後の諸々の「西洋の衝撃」論や近代化論・帝国主義論といった主要モデルが西洋中心主義に基づくものだったと批判している。また 1980 年代の中国研究を振り返った際、彼は中国中心史観が中国近代史研究に貢献したことを肯定しつつも、比較史や東アジア地域ネットワーク・少数民族史・海外移民史といった新しいテーマを考えるにあたっては、中国中心史観は研究視角として限界があると述べている。²⁵台湾とアメリカの学術発展のプロセスは決して同じではないが、Cohen のこのような評価は、1980 年代以降勃興した台湾中心史観の歴史研究の状況にも同様にあてはまるのは間違いない。

近年のグローバル化理論の趨勢の中で、台湾を国際的な学術討論の場に取り上げるには東アジアを視野に入れる必要がある。東アジアの儒学・漢文からトランスナショナルなカルチュラル・スタディーズにいたるまで、異なる分野の台湾研究者が台湾という島を飛び出し、活動範囲や視野を外に広げている。²⁶

23 Michael Shi-Yung Liu. *Prescribing Colonization: the Role of Medical Practice and Policy in Japan-Ruled Taiwan* (Ann Arbor, Michigan: AAS, 2009) ; 曾文亮「全新的舊慣——日治時期總督府法院對臺灣人家族習慣之改造」『臺灣史研究』第 17 卷第 1 期、2010 年、125～174 頁。

24 許雪姬編『日記與臺灣史研究（上）（下）』（台北：中央研究院臺灣史研究所、2008 年）；許雪姬「日治時期台灣人的海外活動——在「滿洲」的台灣醫生」『臺灣史研究』第 11 卷第 2 期、2004 年、1～75 頁。

25 Paul Cohen. "Revisiting Discovering History in China." *China Unbound: Evolving Perspectives on the Chinese Past* (New York: Routledge Curzon, 2003), pp. 185-199.

26 王宏仁、郭佩宜主編『流轉跨界——跨國的台灣、台灣的跨國』（台北：中央研究院人文社會科學中心